母性看護学実習における看護学生の達成目標観を変容させる要因に関する調査的研究

寺村ゆかの、湯舟　貞子

問題と目的　看護学生の臨地実習では、内発的動機にもとづく主体的学習が必要である。Dweckによる認知的動機モデルは、他者からの良い評価を求め悪い評価を避けるというパフォーマンス目標（以下PG）が外発的動機と、学習の過程をとおして自分が有能になろうとするラーニング目標（以下LG）が内発的動機と関連していることを示している。本研究では、臨地実習そのものが学生に主体性を求めることから、実習前より実習後のほうが学生のLGが高まるという仮説を検討すると同時に、実習前のLGを高めると考えられる要因と、実習中のどのような要因（経験）が実習後のLGを高めるのかを検討した。

方　法　対象はK短期大学看護学科３年生67名。調査期間は2005年５月から11月まで。臨地実習前・後に質問紙調査を実施。調査内容は、実習前では「性別・年齢・現在の居住形態・育った家庭の家族数」「友人関係を測定する４項目（４件法）」「学生生活を測定する４項目（４件法）」「達成目標観を測定する項目（PG11項目、LG９項目、いずれも５件法）」であり、実習後は「実習中の経験をたずねる項目（自発性・主体性４項目、有能感・効力感４項目、教員・臨床指導者への同一視４項目、いずれも５件法）」「達成目標観を測定する項目（PG11項目、LG９項目、いずれも５件法）」であった。「性別・年齢・居住形態・家族数」以外は、各項目の得点を加算した合成得点を算出した上で分析した。

結　果　実習前の分析：友人関係得点と学生生活得点を同じ程度の人数に３分割して、それぞれ高・中・低の３群を同定した。これらを独立変数とし、PG得点・LG得点を従属変数とする分散分析をおこなった結果、友人関係・学生生活いずれにおいても、LG得点に関してのみ有意差が得られた。

実習前後の達成目標感の変化：PG・LG得点に関して対応のあるｔ検定をおこなった結果、LG得点に関してのみ有意差が得られた。

達成目標の変化と実習中の経験との関連：実習後のPG・LG得点から実習前のPG・LG得点を引き、差のない（０点）対象者を除いてプラス群・マイナス群を同定した。これら２群間の主体性・自発性得点、有能感・効力感得点、同一視得点をｔ検定した結果、有能感・自発性得点に関してはPGプラス群およびLGプラス群が高く、主体性・自発性得点に関してはLGプラス群が有意に高いことが実証された。

結　論　「良好な友人関係」「満足な学生生活」が、臨地実習開始前のLG（＝内発的動機）の高さと関連する要因であることが実証された。臨地実習によって学生のLG（＝内発的動機）が高まること、そして、その高まりは実習中に「主体的・自発的な行動」「有能感・効力感を感じる経験」によってもたらされることが実証された。